みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

オルタナティブな出産の実践とライフデザイン：アメリカ・スイスを中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009054

オルタナティブな出産の実践とライフデザイン
——アメリカ・スイスを中心に

鈴木七美

すずき・ななみ——人間文化研究機構国立民族学博物館、先端人類科学研究部・教授。歴史人類学・医療社会史専攻。主な著書に、『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』（新曜社、一九九七年、二八四頁）、「アメリカの女性たち」（綾部恒雄編『女たちの民族誌2』（弘文堂、一九九七年）、『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』（世界思想社、二〇〇二年、二九八頁）、「産む　生殖観と子ども観の変容」『ジェンダーで学ぶ文化人類学』（世界思想社、二〇〇五年、一六六～一八六頁）、「医療・身体論」『文化人類学20の理論』（弘文堂、二〇〇六年、二一三～二三〇頁）、「デンマークの福祉における余暇の思想」『人間学研究』七号（京都文教大学、二〇〇七年、七十五～八十七頁）。

アメリカにおける出産の近代化とオルタナティブの登場

自然観・人間関係観への問い

十八世紀末より欧米諸国で進行した出産の近代化＝医療化は、アメリカ合衆国の中流階層では、助産者が「産婆 midwife」から医者へほぼ一〇〇％移行するというドラスティックな変化を遂げ、第二次世界大戦以降の日本の出産の場にも大きな影響を与えた（鈴木七美「アメリカの女性たち」『女の民族誌2』）。この出産の変動期には、変化を問題視するオルタナティブ運動が次々と現れた（鈴木七美『出産の歴史人類学』）。

十九世紀の植物治療運動は、出産の痛みを除こうとして瀉血や薬を与える医者の助産を批判し、身体の自然な過程としての出産における待つ時間の重要性や、経験豊かな産婆による助産を再興することを訴えた。「産婆の時代」とよばれる十八世紀までの出産には女性たちのみが立ちあい、産婦が身体の力を発揮できるように、鶏のスープやスパイス入りの温めたワインを産婦に与えた。出産にはパレットベッドと呼ばれる藁のベッドや出産の椅子が用いられ、女たちは両側から産婦を支えた。産婦は、産後に女たちをグローニング・パーティーに招き、食卓がうなる（groaning）ほどのご馳走を皆で楽しんだ。出産は女性たちが交流する結節点でもあった。

十九世紀半ばの水治療運動は、自然な過程としての出産を達成するために、女性たちが教えあい励ましあって近代化・産業化で弱体化した身体を強化し、変化の時代を生き抜く新しいライフスタイルを確立するネットワーク形成を目指した。

オルタナティブにおけるゆらぎ

出産の医療化に抗したオルタナティブ運動はいずれも、自然の過程の一つとして「痛み」を捉えるのか、出産の主役やこれを支えるネットワークを形成する人々は誰なのか、という変動期のライフスタイルを問い直す活動であった。とはいえそれらは人々

の生活における変化を反映するものでもあった。「産婆の時代」に戻ることを訴えていた植物治療運動では、『健康への新しい手引』のなかに「夫と二人で行う出産」という項目が設けられ、方法が細かく指南された。そこでは、女たちがかつてのように援助しあうことが日常的ではなくなり、助産することを恐れる者も現れたことが記されていた。水治療運動においても、やはり「夫の協力」として身体をさすることなどがあげられており、出産をめぐる人間関係やネットワークの変化がうかがわれる。

十九世紀後半以降は、産婆か医者かという議論は現実的ではなくなり、人々は同時代に開発された医療技術をライフスタイルに従って選択する傾向があらわれる。

トワイライト・スリープ

十九世紀半ばにはエーテル麻酔が使用されるようになり、これを望む場合には、病院で医者の助産を受けることになった。意識が朦朧とした状態で子どもを取り上げてもらうことに関しては、産むことへの参加という点で議論もなされた。だが二十世紀初頭には、女性だけが出産の痛みに耐えるのは不平等だとして、女性の権利として無痛分娩を主張する無痛分娩運動がアメリカで繰り広げられた。

ディック＝リードの提唱

一九三〇年代には、イギリスの産婦人科医ディック＝リードが、〈母〉となることを強く望みそれに喜びを感じていれば出産の痛みを強く感じることもないという説を述べた。アメリカの女性たちの中には、母となることを深く経験したいと願う者も現れ、大学卒業資格を有する女性たちが仕事を離れ家庭に入る傾向もみられた。

ラマーズ法への注目

公民権運動がさかんであった一九六〇年代には、出産に関しても新たなスタイルが模索された。呼吸法によって痛みや身体の状態をコントロールできるとするラマーズ法の適用により、「よりよい出産」を経験することが注目されるようになった。同時に、出産の時を夫と妻が共に経験することも、新しい家族の門出として重視された。

出産をめぐる考え方や方法への注目は、ライフステージにおける変化の時を、いかなる自然観・人間関係観に基づいて迎え、また新たな暮らしを始めることへの契機とするかに関する考え方を照らし出すものだったのである。

子どもを迎える現代の多様なありようとネットワーク形成

「出産の椅子」が使用されるオランダ

アメリカとは異なり、助産者が産婆から医者に完全に移行するという経験を持たないオランダでは、現在も、助産を中心的に担っているのは助産師である。家庭医がプライマリーケアを担当するオランダでは、出産に関しては助産師がそれを担当する。出産の場では日常的に「出産の椅子」が使われており、明るい助産所は、親たちが生後の子どもの検診を受け相談をする場でもある（写真1）。

スイスの助産師と子どもをめぐる関わり

スイスでも助産師が助産に関わり続けている。北東部スイスのアッペンツェルでは、かつて医者の助産に異議を唱えて病院を辞め助産所を開いている助産師オッティリア

のもとには、広くスイス以外からも妊産婦が訪れる（鈴木七美『癒しの歴史人類学』）。体力をつければ出産は問題なく進行すると主張する彼女と共に、妊産婦は家庭菜園を耕し料理を作り日常生活を続けながら出産の時を迎える（写真2）。この方法に魅力を感じる助産師の卵ダヤは、学校で学ぶことに加えオッティリアにも弟子入りしている。北東部ザンクトガレン州で暮らすマルは、自宅で家族とともに出産することを望み、オッティリアに子どもをとりあげてもらった。その後も、助産師と家族のつきあいは続いている。高齢者施設でマッサージを担当するマルや少年保護司の夫は、生活時間についていつも検討しており、働く時間を制限して昼食後には家族で果樹園の手入れをしている。

とはいえ、地方の人々だけが助産師の世話になっているのではない。ザンクトガレン州立病院のようなところでも、通常妊産婦のケアをするのは助産師であり、とくに問題がなければ分娩も助産師が担当する。家庭であれ病院であれ、出産においては助産師と医師が連携している。出産の方法に関しても、産婦の心地よさが配慮されて、水中出産や綱に掴まる姿勢の出産が実践できる。スイスにいると、様々な治療を受け

写真1　オランダの助産所で使用されている出産の椅子。（ハーレム、2000年、筆者撮影）

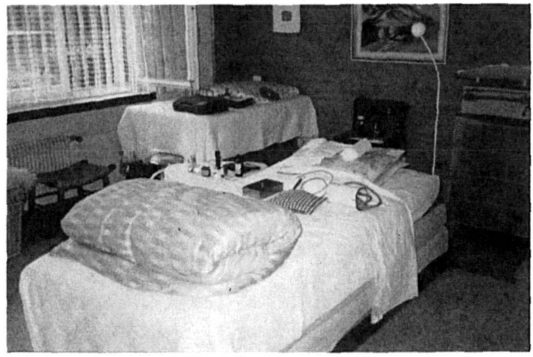

写真2　スイスのオッティリアの家の分娩室と器具。窓辺には新生児の心音を聞く器具が置かれている。（アッペンツェル、1997年、筆者撮影）

写真3　鍼灸など世界の様々な治療を受け養生術を学ぶことができるパラケルススクリニック。滋養物として "Bancha" や "Miso" も販売されている。（レストミューレ、1998年、筆者撮影）

られリフレッシュできる施設がそこに設けられており（写真3）、自給自足の生活に関する情報も豊かだ。ここは、早くも十七世紀に、教育を受けた専門職のみによる医療に疑問を唱え、民衆が蓄積してきた治療術を収集するため各地を巡ったパラケルススが活動した地でもあり、ホメオパシーなど数々のオルタナティブ・メディスンの発祥地でもある。

写真4　スイスの世界の子どもの学校（トローゲン、2007年、筆者撮影）

ベビーシャワーに集うカナダの人々

二〇〇八年七月に私が訪れたカナダのモントリオールでは、週末に行われる看護師シャーロッテのベビーシャワーの話で持ちきりだった。シャーロッテは十月に出産予定だが、その数か月前には、主として女性の友人・知人たちによってベビーシャワーが企画される。皆がそれぞれ出産後必要な実用品を持ち寄って集まり、おいしい物を食べて楽しむ会だ。プレゼントを開ける瞬間が楽しみだそうだが、最近は、数人が集まってベビーカーを買う金を包むこともあるという。女性のみならず、夕刻には男性たちもやってくることもある。日本の民俗であった帯祝を彷彿とさせる集まりである。

子どもたちの移動と新たなネットワークの模索

スイスではカナダやデンマークなどと同様に、国際養子縁組が比較的さかんに進められている。生殖医療には慎重な対応を続けてきたスイスだが、国外から親が育てられない子どもたちを引き取って育てることには関心が向けられてきた。戦争・貧困などを経験した子どもたちが共に暮らし学ぶことができる施設は広く知られており（写真4）、国際養子縁組に関しても法律整備の指針を示すなど国際的に中心的な役割を果たしている。国際養子をもつ親たちが協力しあうネットワークの活動は親のみならずより多くの人々を巻き込み、様々な文化的催しの中心として異文化体験の場や、子育てに悩む人々が集まる場を提供している。それは、家族のありよう、ネットワークに関し、多くのメッセージを発信し、子どもとともに生きることを議論し考える機会を人々が共有するきっかけとなっている。

出産方法や子育てのネットワークに関する考え方や実践は、技術が進展しても変わらない、自然の力や人間関係を問い続ける人々のありようを浮かび上がらせる。ウェルビーイング（良き暮らし）を求めて時間の使い方やネットワーク形成を工夫する人々のライフデザインの営みは、いつの時代にも続けられてゆくだろう。